

食品添加物
メディアフォーラム
2010.3.11.

一般人のリスク認知
- その心理的基盤 -

同志社大学 心理学部
中谷内一也

内容

1. 一般人のリスク認知の基盤
2. 一般人のリスク認知の特徴
- (3. リスク認知と信頼)

安全と安心の意味

安全：実態として危険が低い状態

安心：危険が低いと感じる心の状態

安全・安心社会を実現するための正攻法

→ 実態としての安全を高め、人々を安心させる

しかし、この正攻法は不十分のよう。なぜなら；

わが国での食中毒死亡者数の推移

1960年前後 0.27/10万人

1980年前後 0.017/10万人

2000年前後 0.004/10万人

このように、実態としての食の安全は向上

また、今日の日本が豊かな食生活を享受していることは多くの人知っている

なのに、食への不安が高まっているという

多くの人は、長寿は日常生活の安全レベルや医療、福祉の充実次第と考えている

日本の平均寿命(平成21年7月厚生労働省まとめ)

女性 86.05歳(世界一)

男性 79.29歳(トップレベル)

しかも、いずれも過去最高

また、今さらいわれなくとも、日本が世界有数の長寿国であることは誰でも知っている

なのに、国民の不安は昂じているという

ということから、安全→安心という正攻法は機能しない
それはなぜか？

言い替えると、専門家のリスク評価と一般人の安心感
が一致しないのはなぜか？

今日の安全評価、安全管理はリスクベースへ

ここでリスクの本質を検討し、それが安心と一致しない
様子を心理学的に考えてみよう

その前に・・・

ある社会心理学の実験をご紹介します

- ・あなたは簡単な作業をしてバイト代500円をもらった
- ・担当者はそのうちからいくらかをNPO団体のSave the Childrenへ寄付してくれないかと依頼してくる。寄付は深刻な食糧不足にあるアフリカへの援助に向けられるという

その上で、次のような情報を与えられる

この子はロキアちゃん。アフリカ・マリ共和国に住む7歳の女の子。家は極度に貧しく、飢餓の危機に瀕しています。彼女の状況はあなたの援助で大幅に改善されます。

Save the Childrenは、彼女に食料と医薬品、さらには教育の機会を与えるために働いています。



さて、あなたは・いくら寄付をしますか？

(第2の条件)

- ・マラウイの食糧危機は300万人の子供に影響しています。
- ・ザンビアでは干ばつにより300万人が飢餓に直面しています。
- ・アンゴラでは国民の3分の1の400万人が難民となっています。
- ・エチオピアでは1,100万人以上の人々が緊急食料援助を必要としています。

Save the Childrenはこういった地域の子どもたちのために働いています。

さて、あなたはいくら寄付をしますか？

(さらに、第3の条件-先の2つの合体-)

・この子はロキアちゃん。アフリカ・マリ共和国に住む7歳の女の子。家は極度に貧しく、飢餓の危機に瀕しています。彼女の状況はあなたの援助で大幅に改善されます。Save the Childrenは、彼女に食料と医薬品、さらには教育の機会を与えるために働いています。



- ・マラウイの食糧危機は300万人の子供に影響しています。
- ・ザンビアでは干ばつにより300万人が飢餓に直面しています。
- ・アンゴラでは国民の3分の1の400万人が難民となっています。
- ・エチオピアでは1,100万人以上の人々が緊急食料援助を必要としています。

Save the Childrenはこういった地域の子どもたちのために働いています。

さて、あなたはいくら寄付をしますか？

つまり;

私たちの心は統計的なデータではあまり動かされない

むしろ、顔と名前をもった特定事例の紹介が私たちを動かす

ここで、先の問題に戻り、今日の安全評価、安全管理の基本概念である「リスク」とは何かについて考えてみよう

リスクとは

望ましくない状態(エンドポイント) × そうなる確率

ex. 発ガン × 1/10万人

つまり、リスクとは一定の集団を対象する統計的概念

ところが、先の実験結果が示すように

→リスクを伝え、理解されたとしても、あまり動かされない

(フェアであろうとするからこそ統計データを示すのに)

→むしろ、人はストーリー性のある個別事例に動かされる

(単独事例は必ずしも安全/危険を伝えるものではないのに)

二重過程理論 ～心理的な基盤～

人には2つの情報処理システムが備わっており、連携しながら判断、意思決定している

システム1、暗黙的モード、経験的システム、etc.

→拙速、無意識的で感情、直感、連想に基づき、
イメージや物語、個別事例によりリアリティを得る

システム2、明示的モード、分析的システム、etc.

→遅巧、意識的な分析、論理に基づき、
抽象的表象の概念操作や統計指標からリアリティを得る

専門家によるリスク評価（安全評価）；

- ・年間死亡統計や発症者報告に基づいて確率評価
 - ・モデルと利用可能なデータから確率推定
- システム2の成果

ところが、すばやい行為選択をもたらすシステム1に依って人類は何万年もサバイバルしてきた。

一方、システム2の産物である科学的なリスク評価はせいぜい数百年の歴史しかない。

→ 日々の判断ではシステム1が優勢

サイエンスリテラシーを高めても、人をドライブするものはかわらないのではないか？

では、システム1による判断には、具体的にどのような性質があるのか？

2. 消費者のリスク判断の特徴

さまざまなものがあるが、今回は；

- ・ 一次的バイアス
- ・ 利用可能性ヒューリスティクス
→ out of sight, out of mind効果
- ・ リスク認知の2次元
について説明する

犯罪発生件数を推定してみよう

強盗は年間約6000件発生しています。

では；

- ◆ 人質立てこもり事件は？
- ◆ 空き巣は？
- ◆ 身代金目的の誘拐は？
- ◆ 自動車泥棒は？

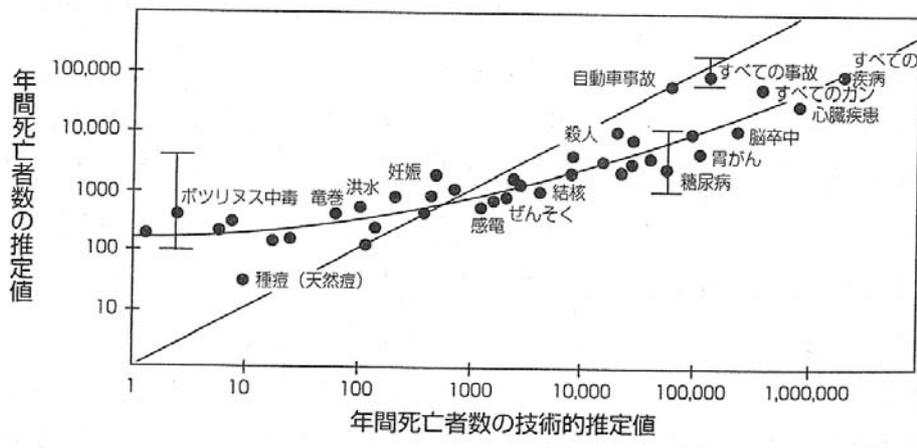


図3 40種類のハザードに対する主観的な年間死亡者推定 (リクテンシュティンら, 1978より)

利用可能性ヒューリスティクス

名前の記憶テスト

ヒューリスティクスとは

人は課題を簡略化し、素早く判断を下すための独特の方法<ヒューリスティクス>を用いる。このため、直観的判断は大はずれはしないが正確ではない。

ヒューリスティクスに応じた系統的な誤りをおかす

利用可能性ヒューリスティクスがもたらす歪み

死亡率問題(1)

毎日、欠かさずタバコを1箱吸う人が100人いるとしたら、そのうち何人が肺ガンまたは喉頭ガンで死亡するでしょう。

再度、死亡率問題(2)

一口にガンと言っても胃ガンや乳ガンなどさまざまあり、近年は大腸ガンが増えている。また、脳卒中のような脳血管系の疾患や心筋梗塞のような心臓病も死因の大きな比率を占める。交通事故や近年増大してきた自殺で亡くなる中高年者も少なくない。

さて、欠かさずタバコを1箱吸う人が100人いるとしたら、そのうち何人が肺ガンまたは喉頭ガンで死亡するでしょう。

||  out of sight, out of mind 効果
(去る者日々に疎し効果)

明示された材料だけで、判断を下す傾向。

当たり前のことでも、明示されないと判断するときの材料として考慮しない。

マスメディアのリスク報道に対して、人々はどのように反応しがちか。一次的バイアス、利用可能性
ヒューリスティクス、out of sight, out of mind効果、
から説明しよう。

ヒント:どんなことがらにニュースバリューがある？

ニュースにインパクトをつけるには？

ニュースでリスクの相対化をしますか？

リスク認知の2因子モデル

専門家は「確率」や「結果の程度」に沿ってリスクをとらえる

しかし、一般人が環境問題や科学技術の話聞いて、受容すべきだとか、拒否すべきだとか考えるときに、「確率」や「結果の程度」という要素で判断しているのだろうか？

違う要素で判断しているというのがリスク認知の2因子モデル

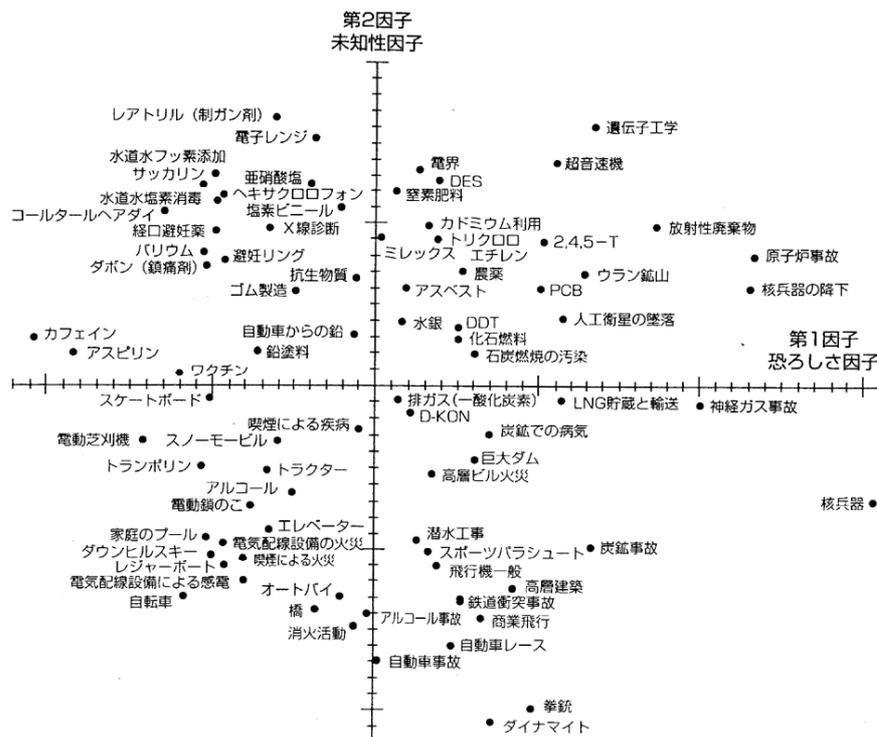
リスク認知の2因子

- ・恐ろしさ因子: 致命的で、いったん発生したら世界規模の惨事をもたらす潜在力があり、制御困難、将来世代への悪影響が懸念され、しかも、リスクへのさらされ方は不平等で、非自発的
- ・未知性因子: 影響が後から現れ、外部から観察できず、本人にも感知できず、なじみがなくて科学的にもよく分かっていない新しいリスク

加えて、食品領域で第3の因子として

- ・人工一天然因子

Slovic (1987) より作成



安全と安心が一致しない理由

- ・これまで述べてきたとおり、専門家によるリスク評価の基本要素(確率、結果の重篤度)と、一般人のリスク認知を支える要因(一次的バイアス、ヒューリスティクス、リスク認知の2因子)とが別物だから
- ・他には？
 - 信頼の欠如。では、信頼は何で決まるのか？

ご静聴、ありがとうございました。